「がらさみちみちたんもにまるや様」

野間一正

一、序

妹尾河童著『少年H』に感心した。言われてみると、そんなこともあったな、とわが過去を再発見した。普通だと見逃してしまう経験まで氏は記憶していて、微に入り細に入り観察する鋭い眼に感嘆のみ。半世紀以上も昔の出来事をもとにした自伝であり、思い違いや過ぎ去りし時の自己や一族を美化する傾向が多少あってもやむをえぬことである。それらを計算に入れてもな感嘆に外ない。妹尾氏は私より二歳若い、同世代人である。育った場所も境遇も異なるにも拘らず、この作品を読むと、通りいっぺんのクロニクルや歴史書では感ずることのできない、戦争を挟んだ時代の体温や臭いが鮮烈に迫ってくる。それも少年の目線を読者に蘇らせながら。

昔の記憶、特に少年時代、に関して言えば、情ないかな、私は全く自信を持てない。永い絶望的な不治の病から逃れるために、過去に未練を持たずひたすら未来に眼を据えて生きてきた。それはあたかも、高所恐怖症の人が、眩暈して足を辷らしたり奈落の底に吸いとられたい誘惑にかられたりしないためには、絶壁の端に行かず或いは遥かな下を見ないのが賢明のように。日記帳は幾度記し、幾度燃やしたことか。そして今手許に一帖もない。青年期の記憶だってかなり怪しいものであるが、ともかくぶどう搾り機でぶどう汁を搾り出すように、滓になった脳味噌を搾ってみよう。

二、高槻学舎

私が大阪外国語大学に入学したのは昭和二十七年（一九五二年）である。結核のため学業を放棄していたため、新制高校からやり直し、通常なら二十二歳で大学卒業なのに入学時すでに二十三歳になっていた。大阪外大は戦災により焼失、戦後高槻に移っていたがこの年から、後期課程は原籍の大阪市内の天王寺区上本町八丁目に戻り、前期二ヶ年のみ高槻で講義を受けることになった。

高槻学舎は、阪急高槻駅から南へ徒歩八分のところに

位置する、工兵第四連隊の跡地であった。教室は木造二階建ての旧兵舎で、真冬でも暖房がなく、その上隙間風が吹き込み、オーバーを着たまま講義を聴く有様だった。図書館と食堂は、レンガ造りであった。

私が遅咲きの二年間の青春を過ごしたこの学舎は、もと高槻城のあったところで、現在は整備のゆきとどいた城址公園となっており、昨年私が訪れた十月末の晴れた日曜日の午後、明るい声が飛び交い、沢山の家族が集う市民憩いの場に変身していた。

三、高山右近

高槻城は、廃城となる明治四年（一八七一年）まで八八〇年間十一氏の持城として栄えていたが、城主として最も名高い武将は高山右近であろう。

高山右近について簡単に述べてみたい。右近は、安土・桃山・江戸前期に活躍した武人であり、茶人（利久七哲の一人）であるが、本領はキリシタンの大檀那（駿府政事録、巻の五）であろう。信仰のためには大名の地位を棄てて顧みず、無欲恬淡、胆の据った大人物と言えよう。

一五五二年（天文二十一年）、摂津高山（高槻北西の山地）出身の高山飛騨守厨書（図書）の長男として生まれる。父飛騨守が松永久秀の武将として大和沢城主であった時、日本人イルマン（修道士）のロレンソから受洗。霊名ジュスト。七三年（天正元年）、高槻城主となり、織田信長に仕える。禄高二万石。七八年、直接の主君である荒木村重が信長に叛き、高槻城は信長と村重双方から攻められ苦境に立ったが、捨身の行動により劇的な解決をみた。翌七九年、本能寺の変では豊臣秀吉の武将として山崎の合戦で武勲をたて、以降秀吉の配下にあって数々の戦さに従軍した。この間、安土にあったセミナリオ（キリシタン学校の一つ）を高槻城下に召致した。多数の領民をキリシタンに改宗させ、八一年の高槻領についての宣教師の報告書によれば、領民二万五千人のうち一万八千人がキリシタンであった（村上直次郎訳『イエズス会日本年報(上)』雄松堂、一〇〇頁）。八五年、秀吉により明石に移封される。右近は増禄されているところからみると（高槻四万石、明石六万石と記した本もあるが、宣教師の報告によると、高槻四万俵、当時二俵＝一石であったので先述のように高槻二万石が妥当と思われる）、京・大坂間の要衝を直轄しようとの秀吉の意図から行なわれたようだ。八七年、九州の役の途次、秀吉は伴天連追放令を発布し、棄教を肯じない右近から領地を没収した。右近は、一時小豆島に身を隠したり、肥後の小西行長領に逗留したり、加津佐を訪ねたりした。八八年、前田利家の客将として加賀に招かれ、小田原征伐に従軍、利家没後も利長に仕え、加賀のキリシタン布教に

貢献した。一六一四年、徳川幕府は禁教令を発布し、右近はマニラに追放された。翌年病没。マニラ市民は右近の死を悼み、盛大な葬儀を行なった。

四、アルバレス先生

大阪外大ではイスパニヤ語学科の学生に属した。すでに大学と称していたものの、授業の実態は外国語学校といった雰囲気であった。外国人教師（現在は客員教授と言っているが、正式には上記身分は変らないようだ）はホセ・ルイス・アルバレス先生であった。非常勤講師もなく唯一のネイティヴ・スピーカーであった。にも拘らず、最初の二ヶ月ぐらいスペイン語の発音とか挨拶とかのクラスがあったあと、私は蓄音機ではない会話などは現地に行けば自然にしゃべれるようになるものだ、と会話の授業は打切り、ここは大学であり大学は学問するところだとおっしゃり、ゆっくりと歯切れのよいスペイン語で（難しい単語や表現は日本語に訳して）イスパニヤ学入門とも言うべき講義を始められた。今のように、音声の教育機材は殆んどなく、あっても非常に高価でとても貧乏学生の手に入ることはなく、またスペイン語を母語とする人をめったにみかけない時代のことである。やっとのことで、スペイン系修道会の教会をみつけて、最初はブラジル人神父とのポルトガル語の会話、次いでカタルーニャ人神父と日・西語交換教授をしたことを思い出す。

「私が曲りなりにも学問を職としておられるのは、アルバレス先生と松田毅一先生のお蔭である。」（『南蛮学の発見・松田毅一先生の追悼と足跡』思文閣）　松田毅一博士には、大学ではなく個人的に、一対一で日欧交渉史のイロハから研究方法までご伝授いただいた。一方、アルバレス先生は、法学博士で外交官の経験もあり、政治・外交に詳しいにも拘らず、内戦期のスペイン政治の複雑な状況に巻き込まれて苦しい経験をなさったせいかそのことは日常余り口になさらず、大学では専らスペインの思想・文学・歴史をご教授いただいた。また、近世日欧交渉史の研究にも厖大な業績があり、ヴァリニャーノ研究は最たるものである。先生の論文は本文より註が多い。その研究態度は講義についても言えることで、ネイティヴ・スピーカーだから適当にしゃべっておればよいなんてとんでもないことで、広汎な学識に加えて周到な準備のうえに行なわれた。

五、キリシタン遺物発見譚

大学からの帰途先生と一緒になった時、工兵連隊跡の同一敷地内にある高槻市立第一中学校の校長天野高信先生が郷土史に詳しいとお教えいただいた。そこで一日、

校長室に天野先生を訪ね、お話をうかがったその折新刊の二冊の本をいただいた。天坊幸彦著『高槻通史』と藤波大超著『攝津三島のキリシタン』である。

後者を読み、事実は小説よりも奇なりとは言い古された言葉だが、正にその通りで衝撃をうけた。かつて高槻藩の属領であった山間地の三島郡清溪（きよたき）村大字千提寺（せんだいじ）と見山村大字下音羽（昭和二十七年刊行時、現在はともに茨木市に編入）で発見されたキリシタン遺物についての話である。大正八年（一九一九年）二月の大雪の日、その地出身の著者藤波氏が東（ひがし）氏（現茨木市立キリシタン遺物史料館長）の祖父藤次郎氏に拒まれながら再三頼み込んで墓地を調査し、二支十字章・上野マリヤ・慶長八年正月十日と刻まれた墓碑を発見した。それを契機に、東家にあったあけずの櫃（ひつ）から、聖ザビエル画像やマリア十五玄義図などキリシタン遺物が多数発見された。また、同家の老婆イマさんからキリシタンのおらしよ（祈り）を聞き取り、それがアヴェ・マリアの祈りであること、その後も北一キロのところにある下音羽でも、キリシタン墓碑や原田家の母家の棟木にくくりつけてあった筒からマリア十五玄義図など次々にみつかった、と。

六、キリシタン遺物の村を訪ねて

聖ザビエル画像（図1）は神戸市立美術館蔵と記してあるので、交通便利なこの美術館にまず赴いた。狩野派の画家が洋画の手法を用いて描いたこの聖人像について種々の論文がある。技の巧拙についてはわからないが、心を把える画である。その時いただいた複製画を額に入れ今でも書斎に掲げてある。なお、この画に関してあとでもう一度触れたい。

清溪村大字千提寺に行ったのは、昭和二十八年（か二十九年）学年末試験の終った二月の日曜日のことだった。茨木駅を出発した折はよい天気だった。右へ左へ曲りつつガタガタ道を小舟に乗っているように揺れながら走るバスを降り、薮の道にふみ入りしばらく歩いていると雪が降りだし、心細いこと限りなし。「十数戸、数戸あるいは単独戸となって山裾や谷間に点在し総数五十戸足らずの小部落」との藤波氏の記述通り（現在多くの家が建て替えられて立派になっているが状況は変りなし）部落全体がひっそり眠っているようで、取り付く島なく、虚しく調査もせず帰ってきた。

その後も心の隅にこのことが残っていて、数年前国立民族博物館でラテンアメリカ学会があった折ＪＲ茨木駅近くの京都ホテルに宿泊したので、千提寺への交通機関を調べたが手掛りをつかめなかった。

昨年十月、ある本に「マリア十五玄義図」の写真が載っていてその下に茨木市立キリシタン遺物史料館蔵と記し

てあるのをみた。早速大学の図書室でその史料館の所在地を確かめてもらった。「茨木市大字千提寺二六二、阪急バス余野行きで千提寺口下車、徒歩九〇〇メートル」とわかった。

タイミングよく同月末京都で日本イスパニヤ学会が催された。京都に宿をとり阪急バス茨木営業所に電話した結果、阪急茨木駅を始発とする忍頂寺行きに乗ればよいこと、一時間に一本ぐらいの割合で運行していることを知った。十月三十一日、日曜日朝十時三十分、阪急茨木駅を発したバスはJR茨木駅を通り、立派に舗装された山間の道路を約四十分で千提寺口に。下車し向って右の山道（細いが舗装されている）を約十五分歩くと人家が数軒みえる。東藤嗣家の横に小さいながらしゃれた建物の目指す史料館がある。昭和六十二年（一九八七年）に開館し、千提寺地区のキリシタン遺物の大部分を収蔵保管してきた。展示品は、「マリア十五玄義図」「牛に乗った天神像」（天神像をはずすと牛の背中に十字が刻まれている）「ロレータ聖母浮彫画像」「キリスト磔刑木像」「メダイ」七個など（複製品は除く）。

この中最も注目すべきは「マリア十五玄義図」（縦八一・九㎝、横六六・七㎝）（図2）である。上部がかなり破損している。なお、昭和五年下音羽の原田家で発見された「マリア十五玄義図」（京都大学蔵）（図3）は完全な状態で保存されている。

七、マリア十五玄義図

マリア十五玄義図とは、キリストの生涯にまつわる聖母マリアの㈠喜び㈡悲しみ㈢栄光、をあらわす三つの玄義（信仰の奥義）に分けられ、更に各々を五つの場面によって構成されたものである。即ち、㈠喜びの玄義は、受胎告知、マリアのエリサベト訪問、イエス降誕、神殿における幼児イエスの奉献、学者と問答する少年イエス、㈡悲しみの玄義は、ゲッセマニでのイエスの祈り、鞭たれるイエス、茨の冠をかぶせられるイエス、十字架を背負いカルヴァリオの丘に向うイエス、十字架上の死、㈢栄光の玄義は、復活、昇天、聖霊降臨、聖母被昇天、聖母の戴冠、である。

当館の「マリア十五玄義図」は、画面中央部は上下二段に区切られており、上段幔幕の下に右手に幼児イエスを抱き左手に白ばらをつまんでいるマリア像、下段左に合掌する聖イグナティウス・ロヨラ半身像、右にマントの内の両手で胸をおさえている聖フランシスコ・ザビエル半身像、互に聖盃（カリス）とイエズス会の会章を挟み向い合っているところが描かれている。更に上段と下段の境い目に、ポルトガル語で、「いとも聖なる秘跡は讃えられよ」と記されている。そしてこの画面を囲むよ

うに、左側に㈠喜びの玄義、上側に㈡悲しみの玄義、右側に㈢栄光の玄義が描かれている。これはまた「ロザリオの十五玄義図」とも称される。

ロザリオとは、ばらの花冠の意味で、祈りを数える念珠のことである。十個の小珠と一個の大珠で一連をなし、その五連を鎖でつなぎ、これに小珠三個と大珠二個の先に十字架を付けた数珠で、コンタス（contas）とも称された。ポルトガル語起源で祈りの数を contar（数える）に由来する。各連の初めに黙想する玄義を唱え、大珠で主禱文（パーテル・ノステル）一回、小珠でアヴェ・マリア十回唱えた。玄義一つ一つにつき繰返し黙想を重ねた。マリア十五玄義図は、この黙想のよすがとして用いられた。百五十回のアヴェ・マリアが唱えられた。

八、アヴェ・マリア

清溪村大字千提寺東家の老婆イマさんの唱えたオラショを次に記す。

㋑「がらさみちみち、たんもにまるや様、御礼をなし奉る。おんなるす様御身と共に女人の中に於てましましてご果報よみしきなり、またおんたんねんの尊き御身にてまします。でうす様の御母様たまりを様、いまもわれらが最後に、われ悪人のためにでうす様を頼み給へ、あんみんじすまりを様。」

随分変型してしまっているが、これは現在カトリック教会で唱えられている「天使祝詞（アヴェ・マリア）」で、

㋺「めでたし聖寵満てるマリア、主おんみとともにまします。おんみは女のうちにて祝せられ、ご胎内の御子イエズスも祝せられたもう。天主の御母聖マリア、罪びとなるわれらのために、今も臨終のときも祈りたまえ。アーメン。」

と同根である。右は次に示すラテン語文の翻訳である。グノーの「アヴェ・マリア」も、マスカーニの「カヴァレリア・ルスティカーナ」の「聖なるマリア」もこの祈り文をそのまま歌詞としている。

㋩「Ave Maria, gratia plena, Dominus tecum, benedicta tu in mulieribus, et benedictus fructus ventris tui, Jesu, Santa Maria, Mater Dei, ora pro nobis pecatoribus, nunc et in hora mortis nostrae. Amen.」

下線(1)は、ルカ福音書（Ⅰの28）で、大天使ガブリエルがマリアにやがて天主の母となるべきことを告げた（受胎告知）時の祝詞である。

『めでたし、恵まるる者よ、主なんぢと偕に在せり。』（文語訳聖書）

『おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられ

る。』（新共同訳聖書）

下線(2)は、ルカ福音書（Ⅰの42）で、マリアを迎えるエリサベトの喜びの叫びである。

『をんなの中にて汝は祝福せられ、その胎の實もまた祝福せられたり。』（文語訳）

『あなたは女の中で祝福された方です。胎内のお子さまも祝福されています。』（新共同訳）

上記(1)(2)二文を併せ、西欧では七世紀ごろから典礼に用いられるようになった。後半 Santa Maria 以下は、十五世紀中頃フランシスコ会士シエナのベルナルディヌスによって加えられたマリアへの祈願である。公式の祈りとなったのは、トリエント公会議後の一五六八年である。

一五九〇年、天正遣欧使節は一台の活字印刷機を携え長崎に帰着した。一行の中に、活版印刷技術を学び、更に母型の造り方を修得した者が加わっていた。コンスタンティノ・ドラードと称される日本人は、帰国の途次ゴアで『原マルティノの演述』、マカオで『遣欧使節対話録』などラテン語文・ローマ字による印刷を行なった。帰国後は、ローマ字のみならず国字による印刷も行なった。これらの印刷本は、キリシタン版と称され、六十余種刊行されたが、激しい迫害を通りぬけ、現在三十余種残存している。一五九九年出版の『ぎあ・ど・ぺかどる』に関しては『麒麟』第二号で述べた。この下巻を毛筆で書き写した一七六枚の和紙が千提寺中谷家で大正十一年（一九二二年）に発見され、現在東京大学図書館所蔵。翌一六〇〇年、即ち今から四百年前、「おらしよ」即ち、種々の祈りとキリスト教教義の要点を集めた『おらしよの飜譯』（図4）が長崎で出版された。その中で、先ずアヴェ・マリアのラテン語文を平仮名で記したものを掲げたい。因みに、子音字が二つ続くと次の母音が子音の間に入って発音される。例えば、gratia→garatiaがらしや、plena→peleナぺれな。

㋺「あべまりや、がらしやぺれな、だうみぬすてゑくん、べねぢたつういんむりゑりぶす、ゑつべねぢつすふるつす、べんちりすつうい、ぜずゝ。さんたまりや、まあてるでい、おらぽろなうびすぺかたうりぶす、ぬんくゑついんおらもるちす、なうすてれ、あめん。」

その日本語訳はどのようになされたか。

㋭「がらさみちみち給（玉）ふまりや（あ）に御礼をなし奉る、御あるじは御身とともにまします。女人の中にをひてわきて（べねぢいたにてわたらせ玉ふ）御果報いみじきなり、又御たいないの御実（實）にてまし（べねぢいとにて）ますぜずすは、たつとくまします、でうすの御ははさんたまりや（あ）、いまも我等がさいごにも、われら悪人のためにたのみたまへ、あめん。」

［　］の部分は、ヴァチカン図書館蔵一五九一年版国字

本『どちりいな・きりしたん』（『きりしたん書　排耶書』〈日本思想大系〉岩波書店）に記された文で、『おらしよの飜譯』とは異った部分である。なお、千提寺中谷家より出現した『どちりいな・きりしたん』（現在、東京大学図書館蔵）は一五九一年本の写本と言われている。

㋑のイマさんの唱えていたオラショには、べねぢいた（ポルトガル語 benedita 祝福された、女性形容詞）、べねぢいと（benedito 同、男性形容詞）がないので、それより後年の翻訳からのものと思われるが、現在キリシタン版をみただけでもオラショ関係は七種あり、どれに由来するか特定するのは難しい。

九、おわり

片岡弥吉氏は『かくれキリシタン』（NHKブックス）の中で信仰伝承の環境として次の四つをあげている。即ち、(1)部落全部がキリシタンで、密告が避けられたこと。(2)地下組織を持ち、洗礼とオラショなどの伝承。(3)聖画像や遺物の伝承。(4)殉教地、教会跡など遺跡の存在。

更に、（長崎県）外海と生月のおらしよが掲げてある。

外海のおらしよと記したい。

㋺「ガラサみちみち給ふマルヤ御み御でおなし奉る、御なるじば御身と共にまします、四人の中おいて分けて御はくいいめしきない、又御たいないの御身にて存すジジェスは尊きにまします。デウスの御母サンタマルヤ様、今吾等最後にて、悪人のためささげる奉る、アメンゼウス。」

千提寺の場合は、(3)の聖画像や遺物の伝承を除けば信仰伝承の条件が欠けている。特に、地下組織の指導者が洗礼を授けオラショを伝えた九州地方に較べると殆んどその痕跡もみられない。にも拘らず、秘かに親から子へと二十世紀の二十年代まで伝えられた。変型しているとは言え、九州のオラショに比しても遜色がない。

徳川幕府のキリシタン追究は徹底的に行なわれた。とくに、ミヤコに近くキリシタンの大檀那の旧領に対して容赦はなかった。同じ山間地方の高山にもまた右近夫人ジュスタの実家黒田氏の居城のあった余野にもキリシタンの遺跡、遺物は残されていない。千提寺および下音羽に沢山の遺物が保存されてきたのは奇跡としか言いようがない。

更に、千提寺の東字の聖ザビエル画像とマリア十五玄義図並びに下音羽原田家のマリア十五玄義図は、西洋画の影響を受けた狩野派の画家の描いたもので、一介の農民の入手できるものとは思えない。その上不思議なものは、S.P.FRANCISCVS XAVERIVS, S.P.IGNATIVSと両者にS即ち聖人の尊称が付されている。従って、両

者がグレゴリオ十五世により列聖され（一六二二年三月）、その報せが長崎に届いたのは一六二三年であるから、これらの画はそれ以降に描かれた作品なのである。どのようにして、誰によって、誰のためにこの地にもたらされたのであろうか。

図１　聖ザビエル画像（神戸市立美術館蔵）

図２　マリア十五玄義図（茨木市立キリシタン遺物史料館蔵）

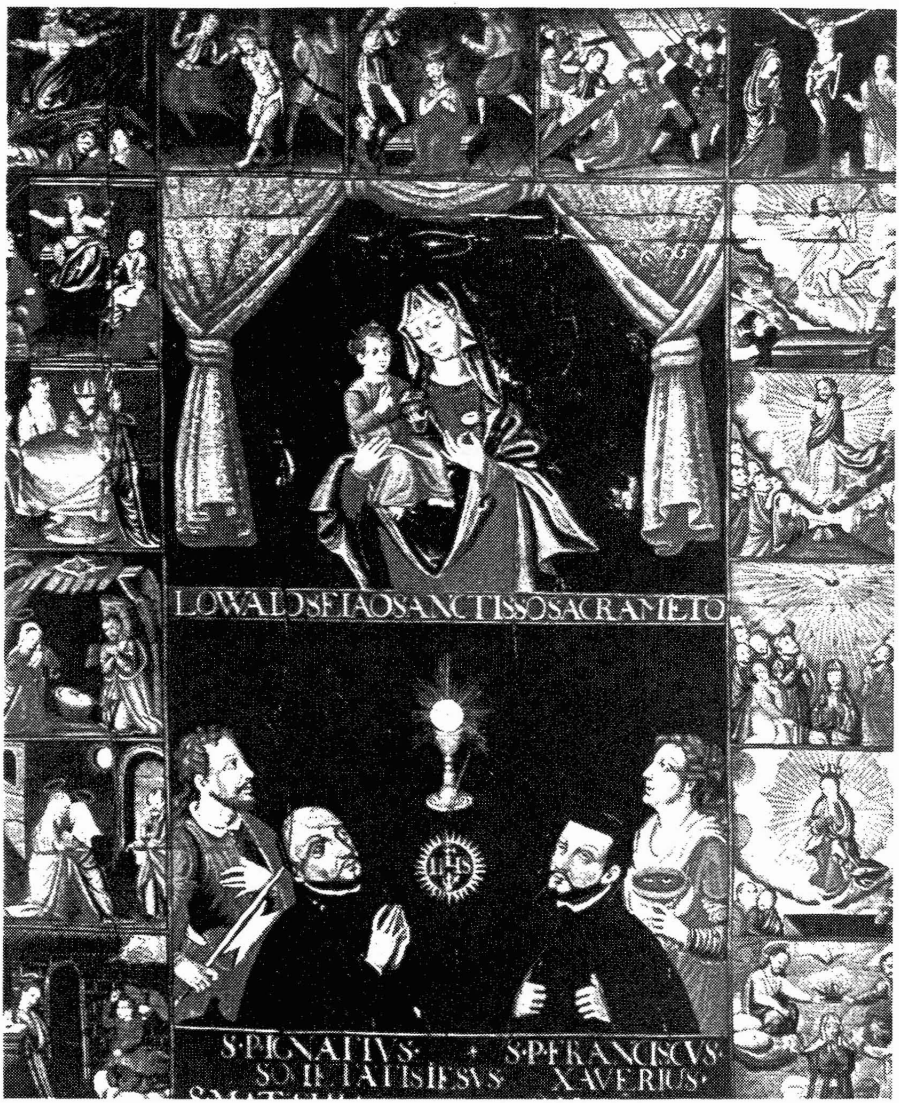

図３　マリア十五玄義図（京都大学蔵）

図4　「おらしよの飜譯」　一六〇〇年　長崎刊

＜追　記＞

一、はじめに

がらさみちみちたんもにまるや様の「がらさ」は、ポルトガル語 graça で「神の恩寵、聖寵」という意味、ラテン語 gratia、スペイン語 gracia「ガラシア」にあたる。細川忠興夫人玉子の洗礼名ガラシアはこの意味である。

平成十年、高槻城三の丸跡調査中、戦国時代の墓地から、蓋に墨で十字架を印いた木棺が発掘された。更に翌十一年、日本で製作された中で最も古いと思われるロザリオが発見された。高山右近が明石に移封される一五八五年より前のものであろう。

右近は高槻城主として十二年、秀吉に追放されたのち、前田家に招かれ大名の待遇で仕えた加賀での暮しは二十五年に及ぶ。生死の瀬戸際に幾度も直面し、戦国の世に多くの人生経験をへて俗世の権力や名誉の儚なさを身をもって知ったが故に、何も恐れず、権力に阿ることもなく、静かな澄んだ心境で模範的生活を送ったのは、高槻よりはむしろ加賀であろう。それが故に大坂城からの誘いに一顧だにせず、淡々と国外追放に甘んずることになったのではなかろうか。

二、ポルトガル王室とイエズス会

禁教令を発し右近を追放した秀吉や家康を、ヨーロッパ人宣教師の伝えるように、無法者としてしまうのはいかがであろうか。信仰・思想の自由を謳った現代社会の考え方からみれば確かに不当な仕置である。また信仰一途な一般のキリシタンの眼には暴君と映ったであろう。しかし当時のローマ教会とてカトリックだけが正しくて他は邪教であり、邪教は滅ぼすべきだとしてインディアスにおいてその地の宗教・文化を潰滅に追いやり、日本においても、寺社を破壊し仏像を焼いた。そしてそのことを手柄話のように報告している。

当時の国際情勢を分析すれば、日本は（ヨーロッパ）イベリア二国の植民地獲得世界戦略の一環に位置していた。国の舵取りの判断力が甘く行動力が鈍ければ国を危くする。スペインだって十五世紀末国を統一するに際し、フェルナンド王とイサベル女王は、国土の統一のみならず、イスラム教徒とユダヤ教徒を追放・異端審問所を設立し、宗教の統一、思想の統一をはかった。為政者の冷酷さには同調できるものではないが・・・

ポルトガル王ジョアン三世は、創立間もないイエズス会にインド布教を要請した。イエズス会創立者の一人フランシスコ・シャヴィエル（ザビエル）は、みずから進んで志願し、一五四一年ポルトガル艦隊に搭乗しインド

に向けリスボンを出帆した。インド、マラッカ、モルッカ諸島など布教しながら、一五四九年鹿児島に上陸した。シャヴィエルは東洋の使徒と讃えられ、のち世界布教保護の聖人と仰がれている。日本におけるシャヴィエルの後継者たちが受け継いだ布教方針の原型はすでにインドでの布教にみられる。その土地の文化・習慣の尊重、原地人の文化向上のための学校の設立、マラバール語やタミール語の祈禱書と教理書の編集など。一方、ゴアの総督はじめ役人の不正を糺弾したり、ポルトガル国王の布教活動に対する熱意の欠除を批判している。シャヴィエルはすぐれた聖者である。それはそれとして、シャヴィエル以前にポルトガル船が九州に来航しシャヴィエルに日本情報を提供している。即ち、日本はすでにポルトガルの貿易圏、勢力圏に入っていた。

三、布教保護権

いかに布教の熱意に燃えていようと、宣教師が勝手に海外の植民地に渡ることはできなかった。アジアにおけるイエズス会はポルトガル王室の布教保護権のもとに布教に従事した。日本でキリシタンの法が弘布された頃は、世界史的にみると大航海時代で、ポルトガルとスペインが主導権を握って世界を二分していた時代である。一四九四年のトルデシーリャス条約により、大西洋上カボ・ヴェルデ諸島とアソーレス諸島を結ぶ線の西三七〇レグワを境界とし、西がスペイン（カスティーリャ）領東がポルトガル領と定められた。太平洋に関しては、一五二九年のサラゴサ条約で線引きをしたものの、当時においては正確をきし難く、フィリピンはスペイン領、モルッカ諸島はポルトガル領となった。両国は互に（住民の意志に関係なく、潜在的に）日本を自国に帰属するものとみなしていた。イエズス会よりおくれて、フィリピンより来日したスペイン系托鉢修道会（フランシスコ会、ドミニコ会、アグスティノ会）がポルトガル系イエズス会と布教の権利をめぐって争った背景には、この領土にからむ布教保護権がある。

布教保護権（ラテン語 patronatus）とは、大航海時代において、植民地の布教に際し国王が保護者（パトロン）となり、宣教師の派遣や教会とその附属施設の設置と運営を後援保護する義務を負い、引換えに、宣教師殊に高位聖職者の選考権を有した。それとともに両国王は、キリスト教徒でない土地を征服・植民する権利をローマ教皇より授った。即ち、魂の征服と領土の征服、宗教と政治が緊密に結びついていた。この聖俗癒着構造は様々な弊害を残した。

四、異国の領土長崎

一九八一年から加津佐で死去する九〇年まで日本初代準管区長を務めたガスパル・コエリョは、キリシタン伝道最盛期にこの任にあたったが、政治干渉に走り上長としての資質に欠ける点があった。八七年、キリシタン大名を援護するためコエリョは、フィリピンに艦隊の派遣を要請したが、余力がないとの理由で拒まれた。その直後、九州征討で博多に滞在した秀吉は、大砲搭載のポルトガル快速船にコエリョを訪れたが、その夜伴天連追放令を発布した。コエリョはキリシタン大名の糾合を策しマニラ総督に派兵を求めたが成功しなかった。そこで、七年前に大村純忠・喜前父子連署の上譲渡（寄進それともイエズス会に対する負債のため）され法的にイエズス会領（布教保護権的解釈によればポルトガル領）となっていた長崎防備のため武器弾薬を集め都市要塞化をはかった。報らせをうけ、事の重大性を感じた巡察使（アジア地区の全権を委任された総長代理）ヴァリニャーノは、急遽マカオから来日し、長崎の武装を解いた。秀吉は長崎を直轄領としたが、断乎たる行動をとらなかったら、長崎はマカオと同じ運命、あるいはもっと大きな犠牲を招く可能性がなかったとは言えないであろう。

五、サン・フェリーペ号事件

一五九六年六月、マニラを出帆しメキシコに向かっていたスペインのガレオン船サン・フェリーペ号が台風に翻弄され土佐に漂着した。秀吉がその積荷を没収したのは不当であるが、その際航海士フランシスコ・デ・オランディアが「スペイン国王は、ペルー、ヌエバ・エスパーニャ（メキシコ）、フィリピンその他諸国を征服する時あらかじめ修道士を派遣し、キリスト教への改宗者が多数になると、その協力を得て武力をもって土地を手に入れた」と、スペインの国力の強大さを誇示した。これが秀吉を刺激し、日本二十六聖人殉教の原因となったと言われている。

六、教経分離

家康は当初スペイン植民地との交易を望んでいた。マニラに使節を派遣したり、長崎に対するに浦賀を江戸の港とし、マニラ・アカプルコ航路を走る船の誘致を計った。上総岩和田沖で遭難したサン・フランシスコ号に搭乗していた前フィリピン臨時総督ロドリゴ・デ・ビベーロを、ウイリアム・アダムスに建造させた船で一六一〇年メキシコに送還したり、一六一三年メキシコ経由でヨーロッパに派遣した使節の搭乗する船を伊達政宗が建造した際にも後援している。両船には日本人商人を乗船させ

ている。しかし、日本とメキシコとの直接交渉はメキシコ・フィリピン間貿易に打撃を与えるとの判断、また、日本人が大洋航海術を身につけてしまうと植民地が侵犯されるとの怖れからか、スペイン側は宣教師を送ってくるだけで日本側の希望には梨のつぶてであった。教・経分離が全くかみ合わなかった。キリシタン禁教令は時間の問題となった。

貿易の利権や武器の援助をうるために改宗し、あげくの果て領土を外国団体に譲渡する地方大名と、広い視野に立って国の行く末を考える天下人とは、当然とる態度は異なるべきである。

七、巡り会わせ

人生は出会いであり、出会いが人生をつくる、とこの頃つくづく思うようになった。「アルバレス先生と松田先生に教えを受けることなかりしならば」と先に述べたが、それに、高槻に学ぶことなかりしならば、をつけ加えたい。『ヨーロッパの文書に現われる大坂』が私の卒業論文の題目。スペイン語で書くのが決まりであったので、主文はスペイン語、副文として天理図書館所蔵になるペドロ・モレホン著『自一六一五年至一九年の日本における状況ならびに日本教会の迫害について』（一六二一年リスボン刊）の中「大坂の役」の個所を邦訳を附して提出した（全文訳は昭和四十八年『モレホンの続日本殉教録』として刊行）。モレホンはアルバレス先生と同じメディナ・デル・カンポの出身である。右近と親しく、右近の聴罪師であった。一六一四年右近らと一緒に長崎からマニラに追放された。右近の最期をみとり、右近の伝記を著わした。

ハ、ガラシアス Gracias（謝辞）

私の教師人生の最後を自由闊達な気風の平塚キャンパスで送ることができたのは誠に幸せである。心やさしき『麒麟』の諸兄姉に出会い、更に、他人にとっては迷惑な駄文であろうが、本人にとっては記憶すべき四つの原稿をまとめ載せていただくことができたのは、怠け者の私を督励してやまなかった名編集長のお蔭である。心より謝意を表したい。

参考文献（この度参照したもののみ）

J・ラウレス　「高山右近の研究と史料」六興出版社、一九四九

藤波大超「攝津三島のキリシタン」大阪府三島郡公立中學校教育研究會、一九五二

片岡弥吉　「かくれキリシタン」日本放送出版協会、一九六七

村上直次郎訳　「イエズス会日本年報(上)」雄松堂、一九六九
松田毅一「慶長使節」新人物往来社、一九六九
「きりしたん書　排耶書」岩波書店、一九七〇
福永重樹「『聖フランシスコ・ザビエル像』に就いての考察」（キリシタン研究第十四輯）、吉川弘文館、一九七二
H・チースリク「高山右近領の山間部におけるキリシタン」（キリシタン研究第十六輯）吉川弘文館、一九七六
海老沢有道　「日本の聖書」日本基督教団出版局、一九八一
「キリシタン遺跡と巡礼の旅」愛心館、一九八一
「日本キリスト教歴史大事典」教文館、一九八八
高瀬弘一郎「キリシタンの世紀」岩波書店、一九九三
「日本歴史人物事典」朝日新聞社、一九九四
H・チースリク「高山右近史話」聖母の騎士社、一九九五
「新カトリック大事典Ⅰ」研究社、一九九六
若桑みどり「京都大学蔵『聖母十五玄義図』のザビエル像について」（『東洋の使徒』ザビエルⅠ」信山社、一九九九